

2015年1～2月掲載分

習志野 大慈弥 爽子

池心よりほぐるる生まれたての春  
一水に添ふ下萌の踏み応え  
根を染めてはうれんさうの甘くなる  
白魚汲む透ける命のひと掬ひ  
川底に日差しの動く春隣

藤沢 藤田 富子

一の酉お手を拝借大熊手  
しろがねの富士の輝きいよよ冬  
空冢とおぼしき庭の鶉紅葉  
十二月何やら心忙しくなく  
古手紙又読み返す十二月

さいたま 宮崎 美智子

保育士を目指す孫の背冬ぬくし  
新巻きを配る道南ゆたかなり  
畳替へ明るるなりし部屋匂ふ  
年用意手抜きの本音ちらり見せ  
書道展うなづきおれば暮早し

横浜 稲田 涼子

浮寝鳥付かず離れず漂へる  
枯れがれていよよ輝く日の尾花  
心急けど何はさておき年忘れ  
細く長く生きて悔なき晦日蕎麦  
蠟梅のいぶし銀なる艶まぶし

町田 小森 まさひこ

初電話に始まる仕事初めかな  
左義長の腹に響きし竹のはぜ  
橇曳くや野生の性も見せし馬  
花数の少なきものに冬の薔薇  
早春の太平洋からくる光

2015年3～4月掲載分

習志野 大慈弥 爽子

旋回に棹を整へ鳥帰る  
陽炎へ近づくことの出来ぬ距離  
ビル高く駅新しく風光る  
囀をはばみ鴉の一大事  
木の芽吹く色に日差しの烟りたる

藤沢 藤田 富子

人波を避けて家族の花筵  
三椀の香をただよはす寺院訪ふ  
囀や甘味処の緋の床机  
咲きそむる花八方へ枝のばし  
春愁や人の話をすぐ忘れ

さいたま 宮崎 美智子

かまくらを灯す明かりのやさしかり  
越の人しみじみ伝ふ雪のこと  
女子高生春の企画に小躍す  
春疾風吹上ぐのれん中に舞ふ  
事始め飴切る音の調子よく

横浜 稲田 涼子

川風の艶めき遊ぶ川柳  
春昼を白河夜船でバスの旅  
句が支ふ余生はまさに春の風  
かるやかに装い出れば風五月  
七色に生きてもみたし濃紫陽花

町田 小森 まさひこ

遠富士も春の兆しの色となる  
高窓に桜吹雪の届きけり  
横山の稜線ぼうと芽吹かな  
花の道の先に空あり富士のあり  
有明の海引いてみてむつごろう

2015年5～6月掲載分

習志野 大慈弥 爽子

短夜の尚結論の出ぬ思案  
生薬をよすが十薬を山と干し  
痛さうな色を透かせる袋角  
木も草も今遠足の子等のもの  
舟に乗り船を見にゆく波止の夏

藤沢 藤田 富子

亡き母の歳すでに越し木の葉髪  
余生とや又年増えて春惜しむ  
春寒や政子の眠る矢倉墓  
春暖にふと気をゆるしたる悔も  
四月馬鹿騙されみても気がつかず

さいたま 宮崎 美智子

礼状の文字大小に入学児  
桜吹雪一人占めしてゆたかなり  
花筏川面を分かつ小舟ゆく  
蜜蜂の手許に絡むやうに来て  
千代紙を売る店先に花吹雪

八王子 石井 蓉子

ランドセルの背をはみ出して新入生  
雪柳歩きはじめし児に揺れし  
花祭り遠き日の事思ふと  
ずぶ濡れの足もうれしき春の昼  
次々と花咲き雲行き春が行く

町田 小森 まさひこ

水平線の丸き先より卯波くる  
松蟬や開拓の碑の縁の欠け  
鈴蘭の野は廃線の跡を消し  
あやめ咲く乙女舟漕ぐ水の村  
山道のうねうねとして花蜜柑

2015年7～8月掲載分

習志野 大慈弥 爽子

一雨の清めし空へ鉾を組む  
雨音に稽古囃の乱れがち  
整理するつもりの写真夜の秋  
写し絵の母に隣て夕端居  
新涼やぴんと効かせるシャツの糊

さいたま 宮崎 美智子

梅の実を拾ひ足利学校へ  
みつを師の墓碑と語りぬ夏初め  
堀辰雄の愛でし信濃路風薫る  
無骨な手に挽ぎたてトマト味見せり  
皺（しわ）の手を握り会ふ日を夏盛り

藤沢 藤田 富子

夏木立庵の奥の茶ぶるまい  
雨乞ひの葉裏にひそとかたつむり  
大店の浅黄ののれん街薄暑  
青嵐裸像両の手空に掲ぐ  
作務僧の箒の先の蝸牛

八王子 石井 蓉子

初蟬や戦世の時思ひたる  
真白なる飛行機雲や五月晴  
よちよちと麦わら帽子が通りゆく  
初夏の風吹きぬけている山の駅  
鳥鳴いて夏の朝の始まりぬ

町田 小森 まさひこ

武蔵野に深まる緑桜桃忌  
庭囲む窓戸全開夏館  
ニュータウンの空き地そのまま月見草  
ひたむきに過ごせし日々や茄子の花  
高き寺に閑けく湧きし雲の峰

2015年9～10月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
一献に酔うて別るる無月かな  
エプロンをはづして二十三夜かな  
望の夜の真闇に月を待つ祈り  
温め酒酌み歳月をきらめかす  
光なす空のさざなみ赤とんぼ

横浜 稲田 涼子  
道づれは月に貰いし己が影  
浦祭波止場舞台に練る神輿  
それぞれに足音違へ落葉道  
控え目に咲くが身上帰り花  
枯れがれていよよ輝く陽の尾花

藤沢 藤田 富子  
マンションの増えさへぎらる遠花火  
暑さのせいばかりと言へぬ怠惰かな  
水仕事増やして日々の暑を凌ぐ  
雲去りて一筋淡き天の川  
汗かきて後れ毛顔にむずがゆし

さいたま 宮崎 美智子  
初秋のよきデザインの店巡る  
秋澄めり坂東太郎ししづかなり  
手を取りていたわり上る秋の滝  
葉の透きて風船葛ばかりなり  
物置かぬ部屋と決めたる秋の夜

八王子 石井 蓉子  
雲に吾見つめられてる晩夏  
今日の空なんだか高く秋近し  
頭たるテレビの前で終戦日  
絵手紙の暑中見舞いの色使い  
一人居の窓辺に一羽小鳥来る

町田 小森 まさひこ  
降り立ちし空港果てまで草紅葉  
冠雪の山を遠くに着陸す  
ぐんぐんと紅葉近づく降下かな  
釣瓶落としに急かされている農事かな  
初霜に色変へていく大平原

2015年11～12月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
引き締める心に冬の立ちにけり  
峡深く来て虎落笛聞く夜かな  
五十年いつも聞き役納豆汁  
大根が好きで古風な子でありし  
味噌味の湯気匂はせて薬喰

横浜 稲田 涼子  
寒鴉の鋭声疎林を串挿しに  
老いの自我おさむ手段の懐手  
刀鎌月上げて寂び荒ぶ真葛原  
奈良山は妻恋ふ鹿の声に更く  
舌を焼くコーヒーうまし今朝の冬

藤沢 藤田 富子  
信濃なる遠き思ひ出星流る  
誰も来ぬ今日この頃や秋の蟬  
秋時雨散歩の足を早めゆく  
台風過大災害を残しつつ  
満月を仰ぎ今宵の倅せを

さいたま 宮崎 美智子  
冬の浜波の花追ふ我若く  
冬すみれ色を増やして並べけり  
庭石の緑際立つ冬の雨  
虎落笛ひとり佇む高架駅  
幾重にも包み贈らるシクラメン

八王子 石井 蓉子  
金木犀の降りくる匂ひに佇める  
秋雨や空さん私も泣きたいの  
はなみずきの実の夕照に色を増す  
秋晴れやなにげない日々過ぎしけり  
ハロウインのかわいいお化け弾む声

町田 小森 まさひこ  
大北風の果てどこまでも波の立つ  
初冬の富士にかかりし雲黒し  
街路樹の落ち葉溜まりや神渡  
熊手照らす電燈揺れて酉の市  
江戸濠の遠き喧噪浮寝鳥